

# 夢に向かって

音楽の楽しさを伝えたい——

佐藤 由紀乃 さん (県北中3年)

私の夢は、中学校の音楽の先生になることです。

音楽の先生になりたいと思ったきっかけは、入部している吹奏楽部顧問の遠藤先生の指導がとても分かりやすく、『私も先生のような指導をしてみたい』と思い、そんな先生に憧れを持ったからです。また、小さい頃から音楽が好きで、小学校低学年から音楽関係の仕事には就きたいと思っていたこと、小学校5年生からピアノを習い始めて、より音楽が楽しく、好きになったこともきっかけのひとつです。部長として、部員一人ひとりの考えを汲み取ってまとめることは大変ですが、誰かに頼ってもらえることがとてもうれしいです。厳しい練習でつらいと思う時もあるけれど、先生に教えていただいた『初心に戻って考える』ことを心掛けて頑張っています。

まずは、高校入学に向けて受験勉強を頑張ります。先生になるためには、その先も目指さなくてはいけないので、夢を叶えるために継続して努力したいと思います。また、音楽は世界中どこでも伝わる言語です。海外に行くなら英語も必要になるので、英語学習にも力を入れたいです。

夢が叶ったら、生徒一人ひとりが真剣に音楽と向き合えるような指導をしたいです。他の教科には好き嫌いがあって、嫌いな人に好きになってもらうことはなかなか難しいと思います。でも、音楽が本当に嫌いという人はいないはず。そんな人たちがもっと音楽を好きになって、楽しんでもらうための手助けができるようになりたいです。



吹奏楽部部長のほか、生徒会副会長も務める佐藤由紀乃さん。「緊張するけれど、演奏の始まりと終わった瞬間の感覚。それがとても心地良くて楽しいです!」と、笑顔で話してくれました。



編集発行  
国見町  
FONT



町長コラム

ま  
真こらむ

【第23回】

## 水害を防ぐために。町村の苦悩

「下流域の人に『遊水地って何?』と言われ、我々との意識の差を感じた。鏡石の予定地には、ほ場整備して間もない農地も含まれる。農地の買収価格は示されたが宅地は未定」と鏡石町長。「移転対象の村民は大半が高齢者。下流域の人は事業受け入れを苦渋の決断と理解を」と玉川村長。「良好な田園風景が一変する。町のアイデンティティが揺らぐ。この判断が子や孫の代以降も残り、検証されることになる」と矢吹町長。これらは、阿武隈川上流改修促進期成同盟会の会議での発言。

令和元年東日本台風では、阿武隈川流域の市町村に大きな被害が出た。国見町も県北浄化センターや家屋、田畑が水没。復旧には長い時間と努力が必要で、今も途上だ。

この後、国と県は「阿武隈川緊急治水対策プロジェクト」を作り、下流域の水害を防ぐために鏡石町、玉川村、矢吹町に一時的に阿武隈川の水を引き入れる遊水地を整備する事業を計画。鏡石町は130ha・70世帯、玉川村は120ha・70世帯、矢吹町は100ha・20世帯が対象。総面積は約350ha。森江野地区の全農地とほぼ同じ。

会議の後、鏡石町長と話す。言葉と言葉の間に、阿武隈川流域住民の命と財産を守る大切さはわかるが、なぜ私たちが遊水地を引き受けなければならないのかという葛藤、移転後の暮らしの不安、補償交渉と住民合意の難しさ、そしてこの事業が下流域の住民に十分理解されていないことへの思いが感じられた。

帰路、かつて県北浄化センターを受け入れた徳江地区の人たちを想像した。そして梅雨に向かう国見町の防災を考えた。

引地真

